

歴 史
探 訪

斜面環境
柿の木は見ていた
西郷さんと山瀬の地すべり

中村 三郎
なかむら さぶろう

防衛大学校名誉教授 理学博士

1
はしがき

九州中央山地のど真ん中にある西米良村は、今も昔も宮崎県下44市町村のなかで人口の最も少ない（2003年3月で1418人）村である。古来、北に接する椎葉村と共に、「鎮西の秘境」とも称せられていた。『西米良村史』（1973）によれば、「江戸時代、この地は田畑少なく、収米僅かに十二石、到底、二千七百余の人口をまかなうことが出来ぬので、粟や稗を常食とし、隠忍自重、相励まし合って峻厳な自然と闘い、植林や生産に努め長い年月を生き抜いた……」とある。山地が卓越する地域の人々にとって、地盤の崩壊域や崩壊による堆積域緩斜面は湧水も多く、耕地として、あるいは居住地としても格好の生活の場となっており、当地方の地すべり地とその周縁には、中世以降の古い歴史を持つ家屋が点々と認められる。

長い年月を経て、近年は道路交通の整備、大ダムや公共施設の建設なども進められ地域も少しずつ変貌し、今日は「村おこし」など盛んな元気な村である。

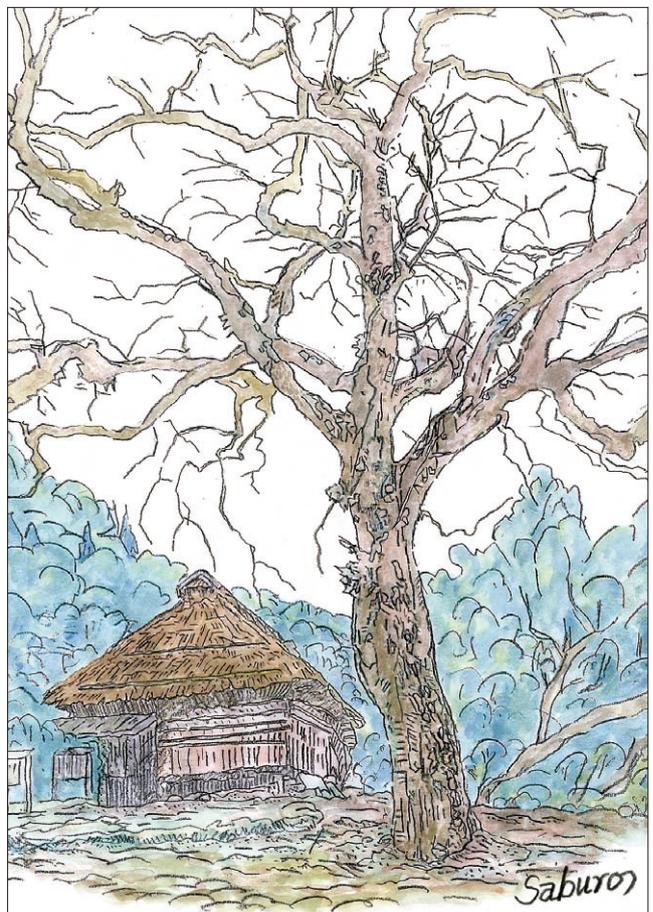


図-1 山瀬下部平坦面に位置する、樹齢約300年の柿の巨木と、西郷さん休息の民家付近図、写真2*印参照(中村三郎2010)



写真-1 山瀬2004年9月 山瀬西側ブロック崩壊直後の状況
北東より西南方向、図2参照(宮崎県・林信雄也2004)

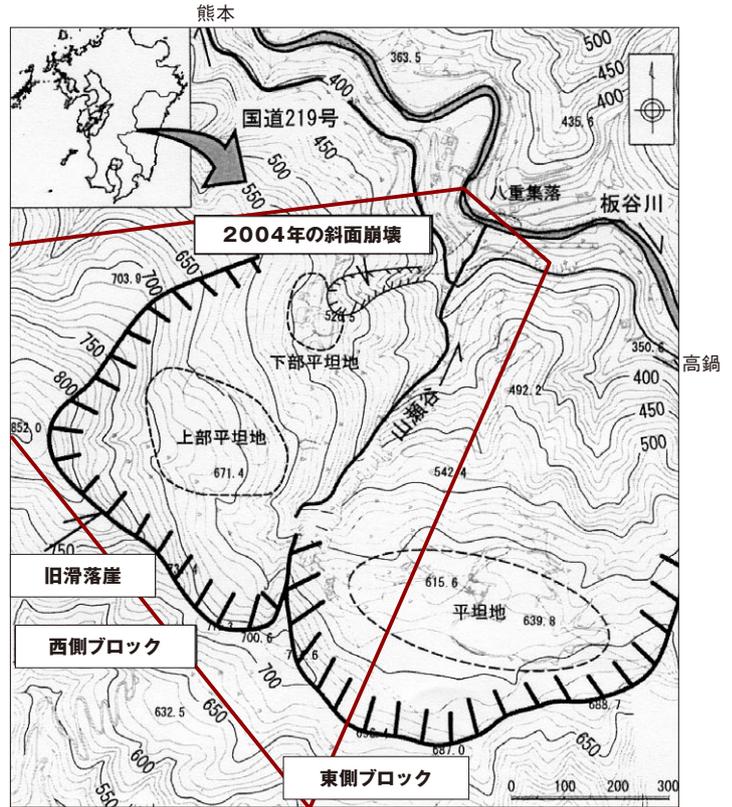


図-2 宮崎県山瀬地すべりの位置図(宮崎県・林信雄也、2010) 写真1,2の撮影区域

2

廃屋の柱

西米良村の北西、村を貫流する一ツ瀬川支流の板屋川右岸、八重対岸の山瀬地すべり地区西側ブロックにおいて、2004年9月斜面崩壊(長さ約400m、幅最大約90m)が発生した。崩壊土砂は民家一軒を直撃埋没し、国道219号の橋下を通過し板屋川の流れを堰き止めたため、上下流の民家9軒が浸水被災した。崩壊土砂の量は約5~6万 m^3 といわれている(図-2、写真-1)。

板屋川右岸現地へ参上し調査に参加した。崩壊域上部の平坦面には二軒の家屋と作業小屋があったが、すでに一軒の家屋と小屋は半壊し、一軒の家屋は残っているがかなり歪みを受け土間などにはクラックが発生している。居住者は避難し時折帰宅され見分している。この桐山家を見せていただいた折、村の村長さん等が「この家屋いつまで持ちますかね……」という。私は単純に「この平坦面しばらくは持ちますが、この家屋について防災上何かの都合がありますか」と問い直すと、村長さんは、「この家の柱を見てください、柱は普通 四角形でしよう、しかしこの柱一つ角が削られて無いんですよ」

という。「実はこのお家 西南戦争の時 西郷さんが泊まったんですよ、泊まれた次の日、この柱を“おいどん”に下さいと申し入れ了解のうえ 西郷さんは抜刀し柱の角を切り落とし、一宿の御礼にと行って その面に何か書き記したという、その柱です」という。当時も今も、西郷さんを敬愛する地域の人々によって言い伝えられた大切な柱にまつわる話であろうか。桐山家の柱確かに角がけずられて平らな面ができ、何か書かれた墨の痕跡が窺えるがはっきりとは見えない。村では、もしこの家屋が地すべりなどによって崩壊するような場合は、事前に西郷さんゆかりのこの柱を確保し、文化財などとして大切に保存したいとの意向を伺い知り、村長の最初の質問の意味が理解できた。

西郷さんの休息された家屋から20mほど離れた小径ぞいには、樹高約18mの柿の老木が立っている(図-1)。この老木は地域の言い伝えでは樹齢約300年とのことである。当時この柿の木、葉を揺らしつつ周縁の「風のこぼれ・水をつぶやき」を感じていたのであろうか。133年前(1877年)の西南戦争のおり、西郷さんが桐山家へ出入りした時のこと、長い年月の人と自然との関わりなど、この柿の木はじっと！ 見守ってきたのであろうか……などと思うと感無量である。

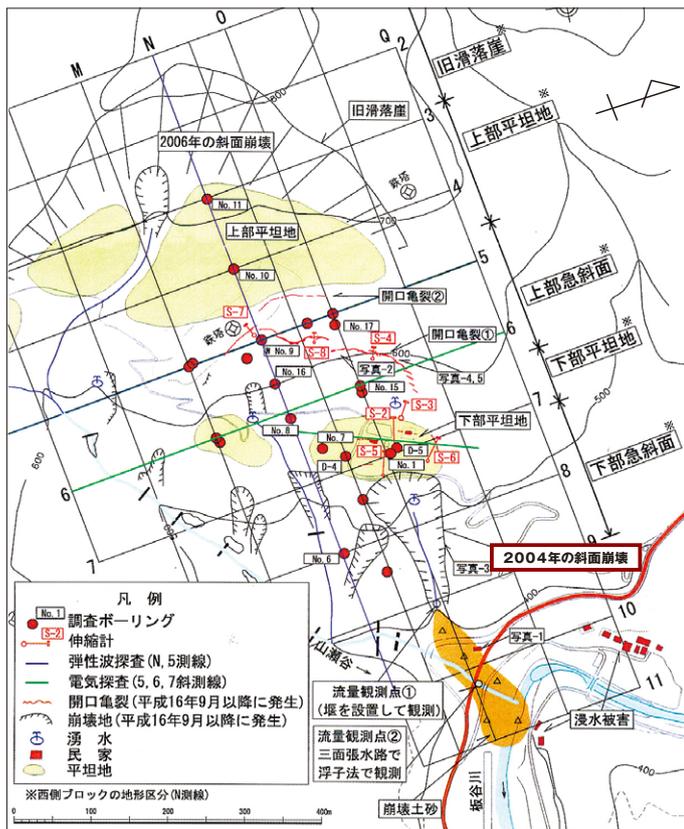


図-3 山瀬地すべり西側ブロック(図2参照)の変状発生箇所と機構調査位置図(図2参照)(宮崎県・林信雄他、2010)



写真-2 対策しつつある西側ブロック、写真中*印は柿の古木および桐山家付近(宮崎県他、2005)

3 山瀬の地すべり

板屋川の右岸側には大規模な地すべり地形が発達している。板屋川の支谷である山瀬谷の左右に発達するのが(西側ブロック・東側ブロック)山瀬地すべり地塊である。今回の斜面崩壊は、いわば山瀬谷北西の西側ブロックの長さ約1000m・最大幅約500mの地すべり地塊の先端部分における崩壊である。地塊上部と崩壊域直上部にはそれぞれ平坦面が発達している。

この大規模な緩傾斜面は、今日の営力と異なる旧い時期の大規模崩壊域の地塊である。二つの平坦面のうち上部の平坦面(標高670m内外)は、旧大規模崩壊の滑落崖下の面とも考えられ、下部の平坦面(標高520m内外)は旧河床面の一部か、あるいは旧い大規模崩壊の折りに押し出され形成された地塊の一部であろうか定かでない。今日各平坦面の周縁部分は時と共に変位・不安定化しつつあり、2004年9月の下部平坦面前面の崩壊による大土石流をきっかけに、大規模地すべり地塊に対する対策も順次進められている(写真-1)。

当地すべりについて、地すべり検討委員会(中村三郎他、2005～'09)・および林信雄他(2010)の資料によれば、当地区の地質は、新生代古第三紀四十層群の砂岩・頁岩よりなる。走行北東～南西、傾斜北へ50～60度で、斜面に対しては受け盤構造となっている。旧期の大崩壊後今日まで、平坦面周縁が長年安定していたのは受け盤構造に由るところが大きかったのではないかと考えられる。基盤岩とその風化岩を被覆する崩壊岩屑土層は厚く、調査の成果によると基盤岩上の貯留地下水位は常時高い。特に下部の平坦面背後の岩屑土層内のものと考えられる貯留水由来の湧水は豊富で、今回早急の排水対策処置が不可欠であった。しかしこの湧水は、古来地域の人々の格好の生活と生産の手段としても活用されていたわけで、家屋もこれらの湧水を利用し得る場に位置していた。そのたたずまいから、傍らの柿の古木と共に長く古い歴史を感じることができる。しかし、その貯留水そのものの存在が、長年の間に地盤の条件に影響を与え、たまたま今日地すべり性崩壊の誘因となっていたものと考えられる(図-3、写真-2)。

林信雄(2008)他の調査成果によると、1)過去の大規

模地すべりによる厚い崩壊岩屑堆積層、特に土砂主体層には粘性土分が多かったこと、2)この土砂主体層が斜面上に分布していたこと、3)集水地形を呈していること、等の地盤条件に加えて (1)2004年の斜面崩壊の発生による背後の上部斜面の安全率の低下、(2)地下水の変動による間隙水圧の上昇に伴う地塊の不安定化が報告されている。その結果 当地区では11本の集水井と集水域における排水ボーリング等の事業が懸命に施行され、今日地盤の安定は小康を得ている。

このような地盤条件をもった山瀬地すべり地区であるが、1~2世紀前の土地条件と土地利用・人と自然に関わる環境はどのような状況下にあったのであろうか。

隣の椎葉村と共に「鎮西の秘境」とまで言われたこの地域にも、今から133年前 時代の大きな波を知らしめる西南戦争の余波がもたらされ、平穏な米良の人々を驚かせた。山瀬地すべり地の二軒家傍らの、樹高20m近く逞しいたずまいの柿の木は、今も昔も変わらぬ葉を揺らしながら、「人の出入り」の気配や家屋背後の滔々と流下する「湧水」のつぶやきを感じとっていたのであろうか。前者は時代の波を、後者は今日の地盤の異変をまねく誘因の一つとなっていたということも考えられる。

4 西南戦争と西米良の里

少年のころ私は九州の事については全く知らなかったが、「西郷さん」という名前については承知していた。鹿児島はもちろんのこと九州の人々にとっては最も敬慕してやむことのない身近の親しい存在、それが「西郷さん」である。

1877年(明治10)に勃発した西南戦争は日本国内最後で最大の戦争であった。そして秘境とまで言われていた西米良の人々をも驚かせた。幕末維新の最大の功労者 西郷隆盛の決起といわれたこの戦いは、133年経た現在でも九州各地にその戦跡を残している。いわゆる征韓論に敗れ下野した後の西郷さんについて、井上(1970)は「彼は、一人の“武村の吉”となって静かに余生を送ることができず、冷酷無情の官僚政権に敗れたが故に、かえってますます近衛兵と薩摩士族をはじめ全国の士族に敬慕され、歴史的に滅亡を運命づけられている彼らの大棟梁に、前よりいっそう高くおしあげられた……後略」このことが彼にとって真に最大の悲劇であったと

述べている。

1877年(明治10)2月15日、南国鹿児島に何十年ぶりの大雪が降りしきる中、西郷隆盛は1万5000の薩軍を率いて鹿児島を出発し熊本へ向かったという。政府はこの西郷の挙を反乱と認め、有栖川宮熾仁殿下を征討総督に任じ鎮圧体制を整えた。両軍の攻防は熊本で始まった。薩軍は先ず熊本城を攻め落とすべく包囲したが、谷干城を司令とする熊本鎮台の抵抗が頑強で城は落ちなかった。その後政府軍は増強され福岡方面から南下し熊本へ入りはじめた、三月には西郷軍の一部は北上し、田原坂において戦争最大の熾烈な攻防が繰り返され政府軍が勝ちを占める。その後、政府軍はなお熊本城を包囲している西郷軍を押し包み激しく攻め立てて、4月14日戦争の結着をつけた。西郷軍は敗走の段階においても、その抵抗は真にしぶとく政府軍は手を焼いたと言われている(図-4)。

4月20日以降薩軍は熊本より矢部方面へ退却し、西郷らは人吉、桐野らは江代へ向かったという記録(酒井2008)が見られる。その後、薩軍は宮崎・延岡・長井・



図-4 西南戦争時の政府軍と薩軍の行動図。(酒井直行、2008)日向の三田井~小林間の薩軍行路については、図5参照

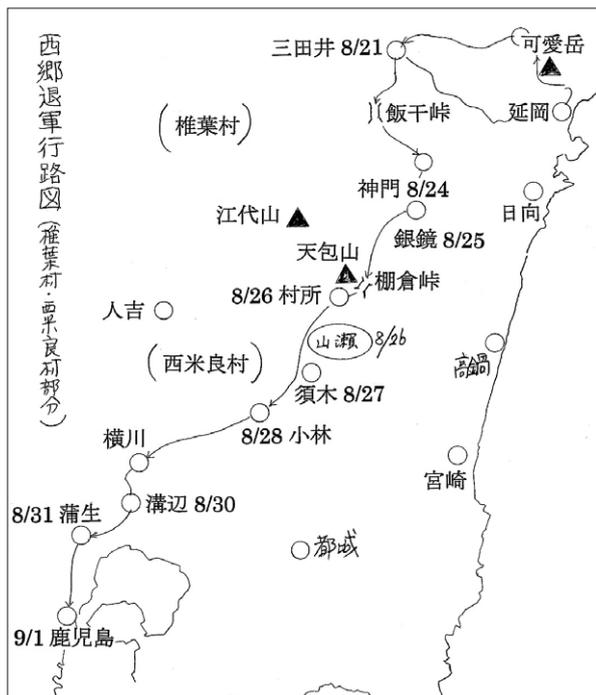


図-5 西郷退軍行路図(甲斐重光、2001)
薩軍の敗走記録はほとんどなく、特に宮崎地区における情報にも異論がある。日程にやや差がみられる。西郷さんは8/26村所を出て当日山瀬の桐山家で泊まったか休息されたものと考えられる。

可愛岳・三田井などにおける戦闘を経て、九州山脈の尾根越えを繰り返し西米良の里へ入ったと考えられる。『西米良村史』(1948)によれば、「薩軍の米良駐屯は約500人、当初村所に本営を置き板屋・西八重・上米良等の守備にあたった」とある。その後西米良村内の小川・銀鏡・天包山・村所など各地において激戦が繰り返された。「8月26日西郷さんは村所を出発し須木より小林を経て9月1日鹿兒島へ帰った」とある。山瀬地すべり地の桐山家で休息され、あるいは泊まられたのはこの時のことであろうか(図-5、写真-2)。

この場所は2004年9月に発生した大規模崩壊域背後の平坦部に位置しており、当時は安定した地形部分であったと考えられる。板屋川沿いの八重集落から、急な山坂沿いにほぼ500m、標高にして約280m登った目立たぬ場でもある。地域の人々は古来、山から流下する豊かな湧水を利用しつつ、狭小な平地を拓き作物をつくり山仕事に拠る生活を継続してきた。この位置からは眺望もよく、人々は朝な夕な北東～東方向の山々を拝し、生活の平穏をも念じてきたのであろうか。西郷さんの突然の立ち寄り、敬愛する大西郷さんと初めて直接会った時の地域の驚愕と感激、「今日はここでよか！」などと言われたかどうか知る由もないが、今日の桐山家と地

区の人々の喜びは想像以上のものであったに違いない。家屋背後の湧水は西郷さんも幾度が使われたのかも知れない。今日、庭の柿の木の枝葉が揺れるのを見ると、133年前の西郷さん滞在のいきさつや雰囲気伝え、何かをつぶやき見守っているのかも、などと勝手に思い巡らしたくなる。翌朝、西郷さんはいよいよ小林～鹿兒島城山へ向け出発した。8月27日朝であろうか(図-5)。出発直前に西郷さんは桐山家のご主人にお家の柱一本を懇望し、柱の削剥面に何か書き記し滞在の御礼代わりにされたという。前述「廃屋の柱」に記載した西郷さんらしい優しいエピソードが伝えられ、ますます西郷さんに対する敬愛の念が深まることとなる。一方、前述の湧水とその挙動は、後年地域の地盤の不安定化に大きな影響を与えることになったが、防災事業の結果、今日小康を得ており西郷さんの滞在した桐山家、その位置する平坦面300年来の柿の木の末永い安定を念じ努力したいものである(写真-3、4)。

西郷さんは、当時逆賊と言われながら事件の前も後も今日にいたるまで、「彼を知ると知らざるとに論なく、彼を愛慕しほとんど偶像視するに至らしめた所以は西郷が軍人としてでもなく政治家としてでもなく、人間として実に大なる魅力をもっていたためといわねばならぬ。



写真-3 西郷さんによって削られたと言われている桐山家の柱(左側)

西郷は日本国民に生ける英雄として千古に存する」と徳富蘇峰は述べている(酒井編著2008より)。山瀬における地すべり現象は、長い長い地球年代の果ての地盤の現象であり、その地すべり地における廃屋の柱にかかわるエピソード・傍らに立つ柿の木のだたずまいから、人と自然・人と社会にかかわる貴重な歴史を垣間みることができる。

5

みえない川と谷の脅威

何が地盤の崩壊を促すのか、誘因が判っても素因が不明な場合が多い。地すべりなど地盤災害の素因を考える時、地質の層序や岩質に由来し造りだされる組織地形的な理解は基本である。しかし忘れてならないのは、

地形面上の新旧堆積物や、山腹の崩壊堆積物によって埋積される以前のその場の古地形、その埋積された谷の広がりや谷筋などの状況把握が大切である。最近では自然現象だけでなく、時には人間による地形の改変も著しく、斜面安定上危険度の高い人工的な埋れ谷もつくられ、災害と背中合わせの状況が出現することもある。その場所性について地域の人々がよくよく自覚し、地球の環境異変が地盤条件に与える影響についても常に思考し、安定した斜面環境対応を保持してゆきたいものである。

山高く谷深い「鎮西の秘境」山瀬の古里、緩斜面や平坦面はかなり古い時期の形成で、湧水にも恵まれた安定した地形部分であったわけで、今日まで地域の人々の素朴な生活を支えてきた場でもあった。2004年9月の平坦面周縁の一部の崩壊、長さ500m・幅約90mの崩壊土石流化は板屋川に到達し八重集落を襲った。この崩壊は、旧大規模崩壊域の末端部分における地塊異変とも見受けられ、今後の水環境条件の異常によってはさらなる大規模な地すべり性崩壊も予想され脅威である。2004年の被災以来 関係者の懸命な防災努力と事業の推進によって、今日 崩壊域地塊とその周縁の安定は小康を得ているが、気候環境の変化が取り沙汰されている昨今、崩壊域の拡大化も考えられ油断できない。

300年を経ているであろうといわれている、山瀬平坦面上の「柿の木」の古木は直径約1m内外で、やや浅黒く縦筋の入った硬い木肌は長い長い歴史を感じさせてくれる。古木のあやしさ・素朴さ・見事なたくましさ



写真-4 直径1mをこえる樹齢約300年の巨大な柿の木(左は筆者)

には圧倒され、畏敬の念をもつ。この古木、133年前、西郷さんがこの地で休息された時より古いということはもちろんであるが、古木の歴史、確かな年数については知る由も無い写真-4。柿の古木の付近と背後の地塊には排水にかかわる各種の地すべり対策が施工されているが、対策による地盤・地塊の条件変化は、今後古木の状況にも反映するだろうか、古木と周縁地盤の挙動に関わるシグナルをも見逃すことなく、地塊のさらなる安定を追跡したいものであります。

謝辞――

本小文記載と現地踏査にあたり、終始お世話さになった宮崎県庁の皆様を始め、林信雄・河村弘之・加藤靖郎・村井政徳の皆様は厚く御礼申し上げます。

★参考文献

- 西米良村教育委員会(1973)西米良村史, 西米良村教育委員会
- 林 信雄, 西園幸久, 後田弘孝, 山本征男, 竹本俊夫, 山本知治(2010); 山瀬地すべり変動の発生機構と対策工, 地すべり, 47巻, 1号p. 51~59, 日本地すべり学会
- 宮崎県・中村三郎他(2010); 山瀬地すべり対策検討委員会資料, 宮崎県
- 甲斐重光(2001); 諸塚村史談会資料, 「西郷退軍行路図」, 諸塚村教育委員会
- 坂上康俊他(1999); 宮崎県の歴史, 山川出版社
- 酒井直行編(2008); 西郷隆盛―孤高英雄全軌跡, 新人物往来社
- 井上清(1970); 西郷隆盛(上・下), 中公新書
- 香春健一(1937); 大西郷突围戦史, 改造社